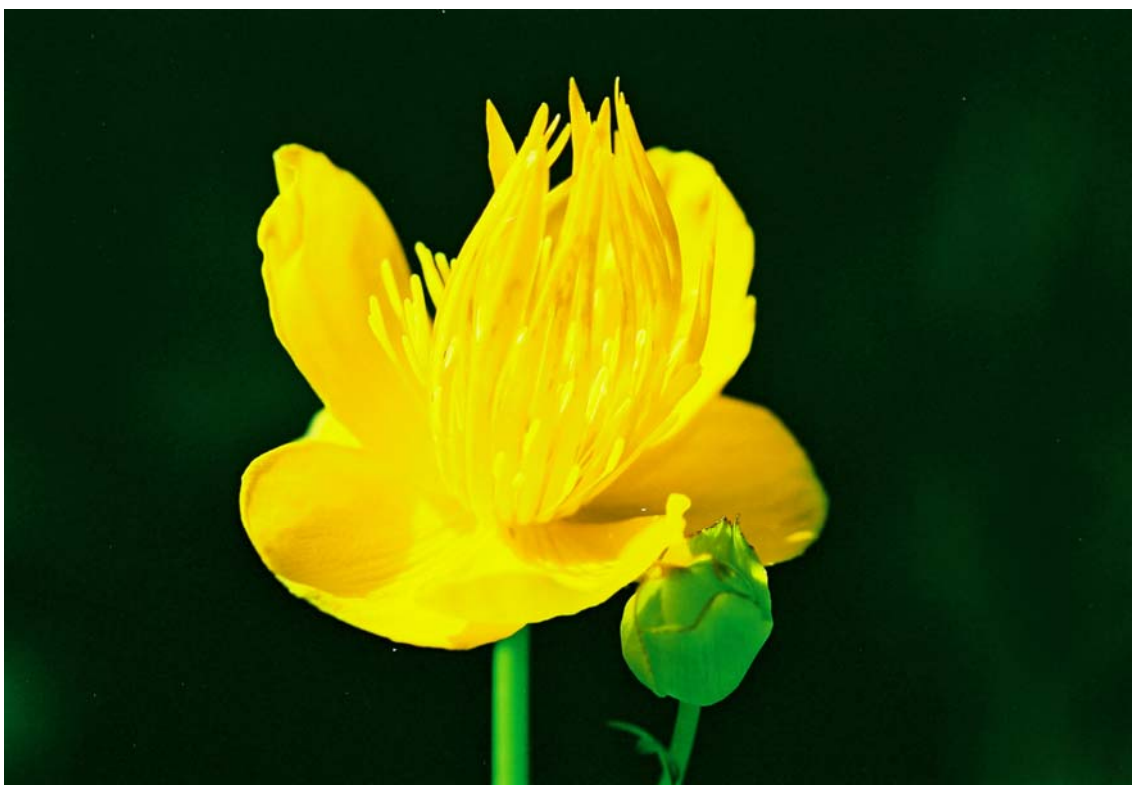


4) キンバイソウ、ギンバイソウ、ギンパイソウ=金梅草、銀梅草、銀盃草

なんともよく似た名前の草本である。キンバイソウはキンポウゲ科キンバイソウ属の多年草で日本の特産種ある。この仲間は北半球の温帯以北に約 30 種が分布し、日本では高山帯もしくは北方の寒冷地に多い。草の高さは 50~80cm ほどになり、葉身は円心形で深く 3 裂し鋭い鋸歯がある。初夏 6~7 月頃より径 4cm 程の鮮黄色の 5 弁の萼片と、それ以上の数にのぼる花弁をもった花を、分枝した茎の先につける。雄蕊は 10~13mm と長く、また多数あって、これも黄色であるために花は大きく目立つ。中部地方の各地や滋賀県の伊吹山に分布するが、山地の湿り気の多い林縁や草原などが適地で、庭で栽培するのは難しい。同じ仲間には高山帯のやや湿り気の多い草原に生えるシナノキンバイや、北海道の礼文島やシベリアの東部、ウスリーなどに分布するレブンキンバイソウ、北海道の利尻島の草原地帯に生える八重咲のボタンキンバイなどがある。またこの花に似たものにリュウキンカがある。こちらの方は花弁が退化して萼片しかなく、主に湿地帯によく生える。

一方ギンバイソウはユキノシタ科の多年草で、東南アジアの特産種として 2 種が知られ、日本と中国中部に分布する。根茎は木質で肥厚して横に這い、葉はアジサイに似ているものの、先端は 2 裂して鋭い鋸歯がある。7 月頃、茎の先に 10 数個の花を散房状につける。花序の回りには普通は 2~3 個の装飾花があり、これは白色もしくは淡紅色で花弁ではなく萼片である。残りの花は両性花で花茎は約 2cm、白色の 5 枚の花弁があり、多数の雄蕊と 1 本の雌蕊がある。一見するとアジサイの様にも見えるが、花の一つ一つは梅の花に似ているためにこの名前がついた。関東地方より西の本州、四国、九州に自生し、やや湿り気の多い斜面や沢沿いの地に時には群生する。しかし一般家庭では育てやすいとはいえない。

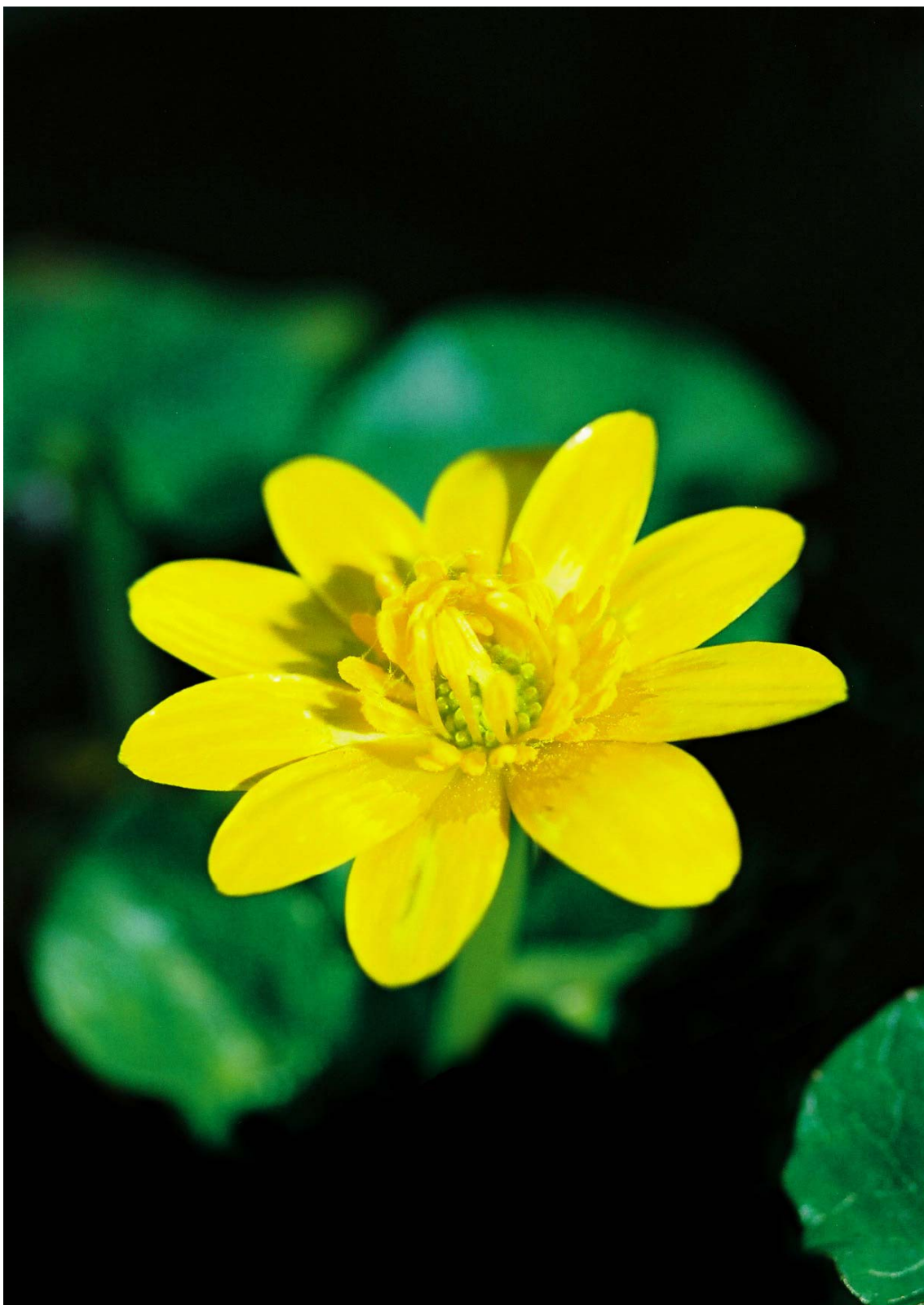
ギンパイソウはナス科の多年草である。原産地は南米のアルゼンチン、チリなどで、ニーレンベルギアの名前でも親しまれている。和名は他にギンサカヅキともいう。葉の形は長い柄の着いたへら形で、芳香のある白い花はまさに杯の形をしており、6 月頃に咲き始めた花は時には 8 月頃にまで及ぶ。繁殖は匍匐枝(ホフクシ)がよく伸びてたちまち広がって行く。株分けをすればすぐに新しい苗を作ることができる。よく陽のあたるところを好みグランドカバーとしては、シバザクラやサギゴケなどとともに最適である。あまり乾燥するところを嫌い、特に鉢植えの場合は注意を要する。その鉢植えであるが、腐葉土を十分に混ぜて、川砂かもしくは山砂で育てるとよい。酸性土よりもアルカリ性のところを好むので、時々苦土石灰等を撒いてあげるようにする。またこの葉はよほどナメクジにはおいしいと見えて、よくナメクジに葉を駄目にされてしまうことがある。時々ナメクジ退治を行なうとよいのだが、苦土石灰はナメクジの苦手とするものであることと、ナメクジはビールでとるのが一番であることは前述した通りである。



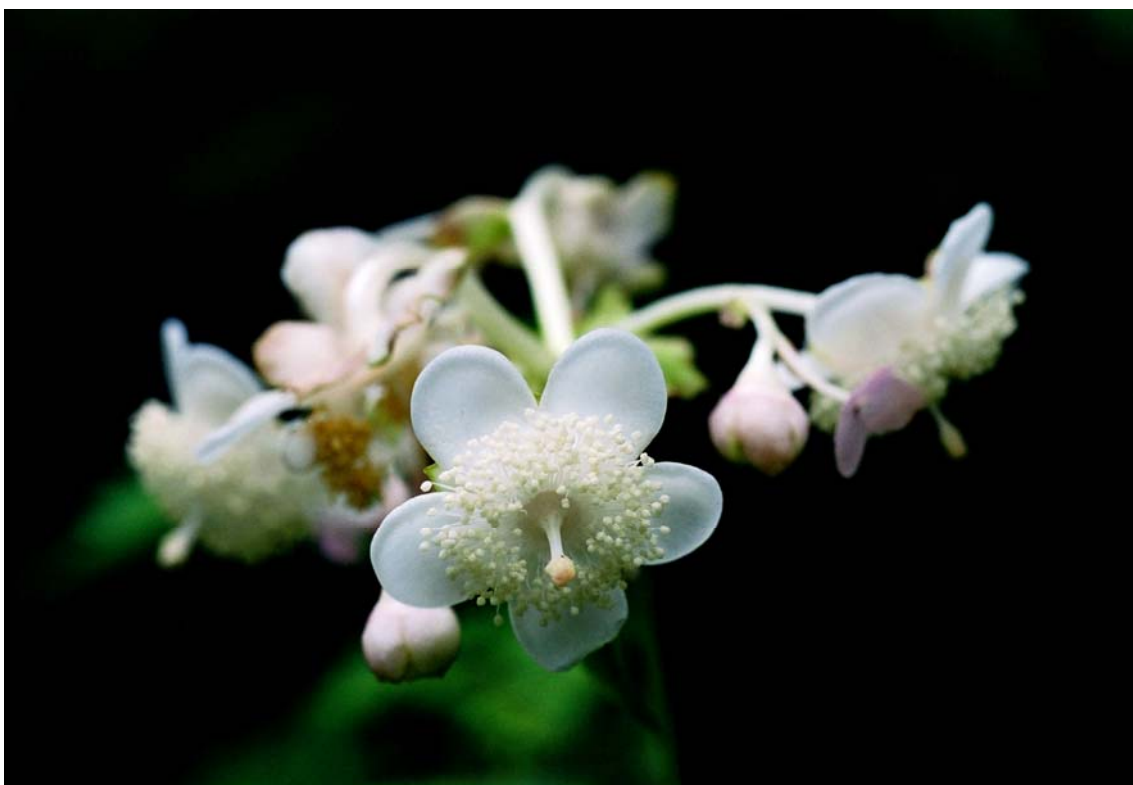
キンバイソウはキンポウゲ科の多年草で、学名は『*Trollius hondoensis*』である(長野県霧ヶ峰)。



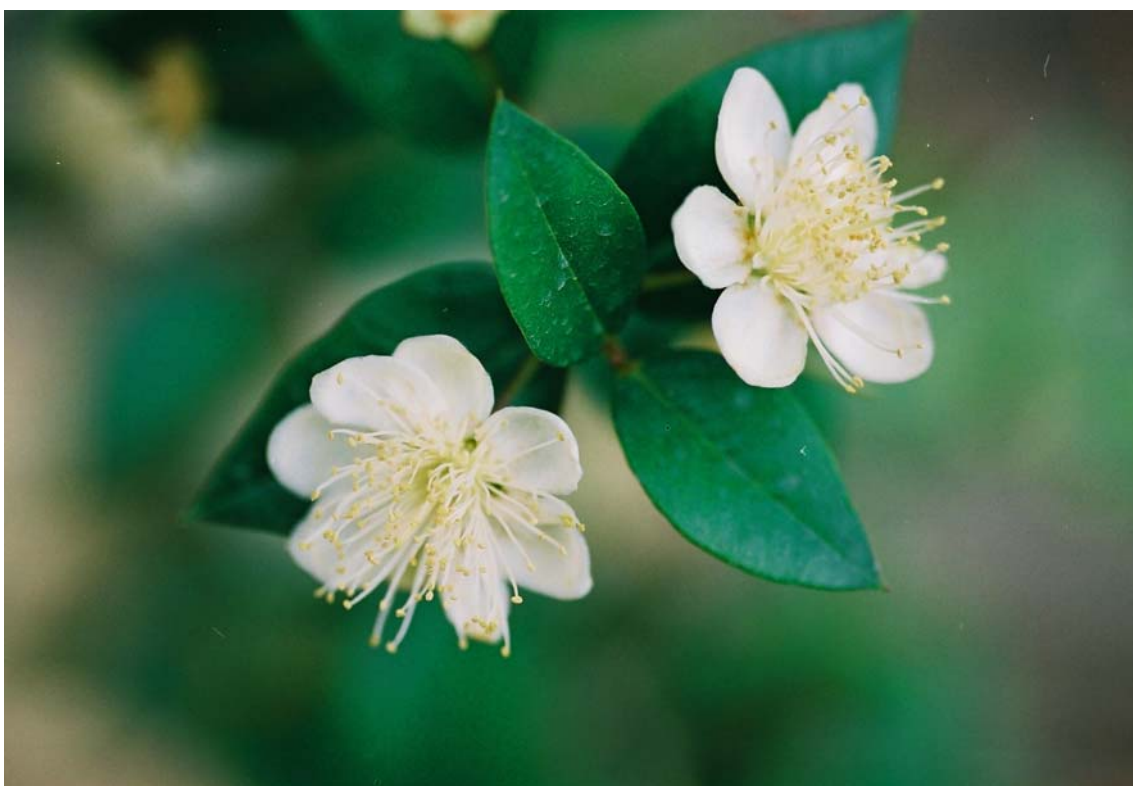
キンポウゲ科のシナノキンバイは高山植物で、花卉に見えるのは萼片で 5~7 枚ある。花卉は線形で、雄蕊の中で区別しにくい。学名は『*Trollius japonicus*』である(栽培品)。



ヒメリュウキンカは学名『*Ranunculus ficaria*』で、リュウキンカ『*Caltha palustris*』に似るが属は異なり、リュウキンカのように花茎が長く立ち上がることはない。ヨーロッパ原産の植物で、寒冷地を好み、リュウキンカと同様に湿地帯に自生することが多い(園芸品)。



山の斜面や溪谷のやや湿ったところで育つギンバイソウ。学名は『*Deinante bifida*』である。



ギンバイカ は梅の花に似るところから漢字では『銀梅花』。学名は『*Myrtus communis*』で、地中海沿岸から中近東にかけて分布し、古代ローマではヴィナスの花だった。



ギンパイソウは盃の形をしているための呼称で、原産地は南米のチリやアルゼンチン。学名は『*Nierembergia rivularis*』であるため、ニールンベルギア(04-01-02-10)として栽培されてきた。



ギンパイソウ(上の写真とも岐阜県高山市奥飛騨)。

[目次に戻る](#)